

上杉鷹山公の藩政改革とファイナンス

米沢有為会理事 加藤国雄◎

(元・野村総合研究所取締役、元・大阪経済大学教授)

金融工学が専門の私だが、リタイアを機に郷土の名君・上杉鷹山公の藩政改革を、ファイナンス（財務・金融）面から定量的に分析しようと思い立った。

以下を現代の経済感覚で理解するには、大まかに米1石＝金1両＝現在の10万円と換算すればよい。

1. 米沢藩の財政窮乏化

江戸時代、全国諸藩の財政は対幕府出費（参勤交代と江戸藩邸経費、手伝い普請）や凶作などで次第に窮乏化した。米沢藩の場合はそれに加え、120万石から30万石、15万石（1/8）へ2度削封されたが家臣約6千人をほぼ維持したことが（碌は1/6に）、財政窮乏化を加速した。

1601年最初の削封の際、上杉家家老・直江兼続は、30万石を50万石まで増収できると確信しており、水田開発や産業振興に努めた。結果1638年の検地では、実高（実際の石高）は51.7万石、後の米沢藩（15万石）域は推定25.4万石となった。さらに1664年（2度目の削封時）には28万石までに増加した。しかし以上は無理に底上げされた実高で、農民には重税を課すことになり、かつ藩財政も恒常的に赤字という状態だった。

米沢藩には、1600年代初めには貯え金が40万両程度以上あったと推察され、それが財政窮乏化を緩和したが、100年後の1700年頃に底をついた。その後借金が積上がり、家臣からの借上げ（恒常化し実質減給）も始まった。農民への課税も苛酷となり、1700年頃13万人超あった米沢藩人口は60年頃に10万人弱まで減少の一途をたどり、実高も推定20万石程度まで減少した。

財政が破綻状態となったのは、1750年代の約6万両の手伝い普請と数年続いた「宝五（宝暦5年）の大飢饉」に見舞われた時である。高利貸しにも頼る状況だった。結果、借金総額は20万両（現在の価値で2百億円）超となり、幕府に領土返上を申し出る寸前までに至った。そのような最悪期の1767年、17才で米沢藩主となったのが九州の小藩・高鍋藩よりの養子・上杉鷹山公である。

2. 上杉鷹山公の藩政改革

藩政改革は次の3期にわたる。

第1期（1767～82年）竹俣当綱執行時代

鷹山率先の大儉約で始まったが、大きな改革は「七家騒動（重臣の反乱）」後の竹俣当綱による「漆・桑・楮百万本植立計画」と金主（大名貸し）への借金負担軽減策であった。植立計画は滞り、第1期は竹俣の失脚で終わる。その後、天明の大飢饉もあり、財政は再び悪化する。さらに、鷹山は隠居するが、後見として藩政には引き続き関わった。

第2期（1782～90年）志賀祐親執行時代

第1期の産業振興策は打ち切り大儉約策を採った。さらに、金主に借金の利下げや返済繰延べを求めたが金主の離反を招き、結局行き詰まった。

第3期（1791～鷹山死去 1822年）荻戸善政らの執行時代

そこで、鷹山は広く改革案を募り、第1期で竹俣を支えた隠居中の荻戸善政の復帰を求め、第3期の改革が始まる。荻戸は、第2期と同じ大儉約と借金返済を継続し、かつ殖産興業をはかる改革計画を策定し、金主への説得で金策につとめた。1、2期に比べ、期初に凶作や普請手伝いの負担が小さかった幸運もあり、改革は着実にすすんだ。農業人口の増加、用水確保に努め、実高も大きく回復し、養蚕そして織物業が発展した。借金解消（永年賦古借以外）まで16年計画だったが、2倍を要し達成は鷹山が死去する1822年頃であった。

家臣からの借上げ（実質減給）は、1721年より碌の1/4、50年より1/2、1821年に1/4に戻したが幕末まで続いた。

3. 三大金主

多くの借金をほぼ返済した1832年においても、かつての無利息化や永年賦化による借金軽減協力への見返りとして、金主に知行や扶持米・金銀を与えていたようだ。そうした領外金主は、75人（うち江戸35人）の商人、豪農、寺院などにわたる。以下、主だった3人の金主を貢献した順に紹介するが、単なる金貸しだけにとどまらない役割を果たしたことがわかる。

(1) 江戸・三谷三九郎家

江戸の豪商で、米沢藩はじめ会津藩、秋田藩など東北諸藩の特産物の江戸での独占販売を通じて大名貸しを行っていた。特に会津藩への貸付は10万両を超えた。江戸幕府の寛政の改革(1789~93年)には、10人の幕府「勘定所御用達」の頭取を務めた。

米沢藩とは1721年から漆蠟の販売を通じて取引が盛んになり、「宝五の大飢饉」の頃には米沢藩の借金額は3万両を超えるに至った。しかし米沢藩が漆蠟の取引を他(野挽家)に変えたため、借金は残したまま融資は断絶した。

鷹山時代に入り、「漆・桑・楮百万本植立計画」に基づく財政再建計画を示した上での説得により、三谷家は同計画や高金利借金軽減のために計1万6千両の融資に応じた。その後多くの他の金主も借金負担軽減要請に応じ、米沢藩は財務面で一息つけた。

謎は、この頃漆蠟は、良質で安価な西方の櫛(はぜ)蠟の進出で劣勢であったのに、同じく漆蠟の盛んな会津藩とも強い関係にあった三谷家が米沢・会津両藩を積極的に支援した真意である。

第3期改革において、三谷家は米沢藩産織物類の江戸での販売にも関与した。

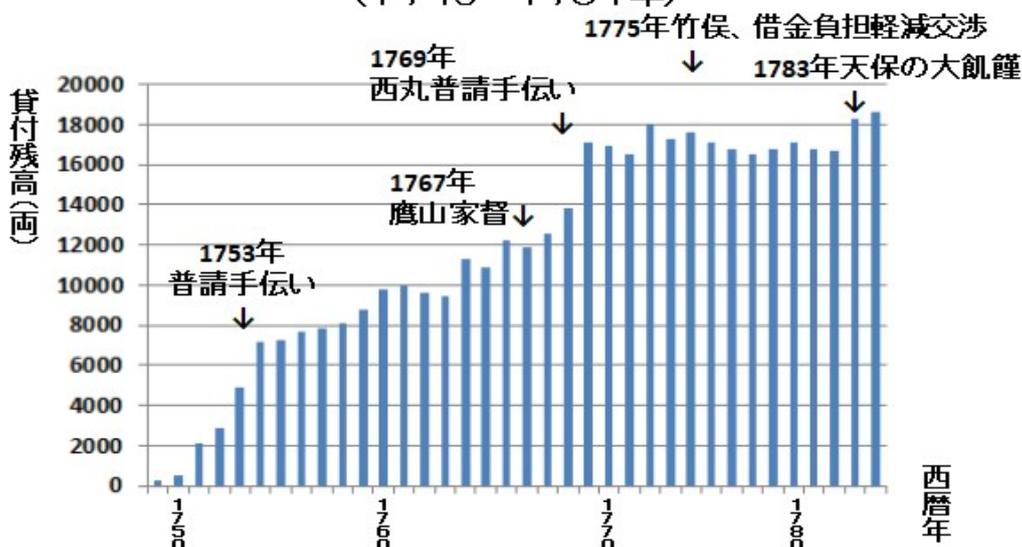
(2) 越後・渡辺家

渡辺家は、米沢から越後へ抜ける米沢街道沿いの現・関川村に邸(国指定重要文化財)が現存する豪商・豪農(かつて武家)で、酒造業・廻船業が始まりである。米沢藩との関係は1720年の御用金融通からが始まりで、渡辺家は周辺商人などからも金を集め借金に応じた。渡辺家の大名貸しは、その後他藩にも及んだが米沢藩が最大貸付先だった。

渡辺家の貸金が増えるのは、米沢藩が財政危機に至った1750年代の「宝五の大飢饉」頃からで、その頃の手伝い普請への融資に応じた領外金主は渡辺家を含む2人のみであった。

渡辺家には、1749年から第2期改革初の84年まで毎年米沢藩への貸付額と元利返済額のデータが残っている。77年の残高1万7千両弱と、それまでの返済額の元本比率61%を手掛かりに、貸付残高の趨勢を示したのが図1である。

図1 渡辺家の米沢藩への貸付残高推移(推定)
(1749~1784年)



1777年までの28年間の貸出利回り(複利)は年9.5%である。次に示す米沢藩よりの碌を加えれば利回りはさらに高い。

渡辺家は、1733年より25扶持を得て藩士待遇となり、86年には分家と合わせ知行計650石までになった(その時三谷家は700石)。竹俣時代には勘定頭同席として藩政に貢献したが、竹俣の丁重な借金負担軽減要請には応じなかったようだ。理由は渡辺家以外からも募った資金だったからと思われる。だが第2期改革での要請(永年賦化、大半の無利息化)には応じたが、それでも渡辺家の利回りは7.3%、仮に貸倒れになったとして6.5%としっかり採算は取れていた。その時点で貸付金累計以上の元利返済金を回収していたからである。

渡辺家は、第3期改革でも勸農資金(後述)などで貢献した。

(3) 酒田・本間家

「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と称された豪商・豪農である。北前船交易などの商業から、金融(大名貸しなど)、田地経営へと業容を拡大し財を成した。

米沢藩との金融取引は、本間家中興の祖・3代目光丘が家督を継いだ1754年からである。光丘は、自費での酒田の砂防植林、地元・庄内藩への金融支援・寄附・藩政参画など社会貢献にも熱心だった。それは米沢藩との関係でもうかがえる。

米沢藩との金融取引や交際費などは、本間家史料『大帳類聚抄』（大福帳を項目別に整理）から分かる。図2は、1754年から1801年までの年別金融取引合計額の推移を示している。

**図2 本間家の米沢藩との金融取引(主として貸付)高推移
(1754~1801年)**



金融取引の大部分は、長くて1年程度の短期貸出で、米・青苧などの藩産物を担保にしたものや支払約束手形の割引などである。貸倒れリスクが小さい取引のはずだが、金利は当初の頃は年利15~18%中心と、先にみた長期貸出中心の渡辺家の利回り(9.5%)よりもかなり高い。本間家の大名への短期貸付は低リスクで収益性の高い事業だったと言える。

図より第1期改革終了の1782年までの取引は、比較的少額で断続的である。返済も滞りがちで、72年の期限1年の900両貸付の返済は、途中無利息を挟み(竹俣の借金負担軽減策の頃)分割払いで10年を要した。その間新規貸付はなく、本間家の厳しい貸付姿勢がうかがえる。

その後の改革第2期、長期借入に対する負担軽減要請(1777年)でほとんどの金主が離反する中、長期貸付のなかった本間家は、金融取引をむしろ活発化している。荻戸善政が第3期改革で再勤するのは91年1月だが、その前年の金融取引額は1万7千両余に急増している。本間家は第2期改革の財政再悪化からの数年、米沢藩を資金繰り面で支えた唯一ないし数少ない大手金主だったと思われる。

1793年、荻戸が財政再建計画を示した上で初めての長期借入2500両を要請したところ、本間光丘はそれに応じ、勸農資金融資を提案し支援した。これは、米沢藩が本間家から4%の低利資金を借入れ、それを農民に8%で貸付け、その利ザヤを米沢藩が再融資するものである。なお、その頃同様の提案を本間家

から受けた庄内藩は、他の提案である徳政（借金帳消し）を選択し、本間家は大きな損失をこうむっている。

第3期改革で本間家が長期貸付に応じたことで、三谷家や渡辺家からも復帰し、鷹山は大いに喜んだとされる。

その後本間家は、1790年代の2度の幕府への手伝御用に対する計8000両の長期貸付にも応じた。さらに、94年からは毎年備前代を献納することとなり、96年には7年分500両を前納している。1803年には、常平倉（穀物貯蔵）設立に尽力し、提供金の利子2000両を献納している。

第3期でようやく成功に至った米沢藩の藩政改革だが、このように本間家による第2期からの金融支援や奉仕によるところが大きい。

2022年に上杉鷹山公没後200年を迎えるにあたり、鷹山公研究の多様な進展に資せれば幸いである。

なお、この研究には湘南科学史懇話会代表・猪野修治氏から同会で2017年11月に講演する機会をいただいたことで本格的に取り組んだ。感謝申し上げます。

本文も含め、この研究シリーズに誤りやご意見などあれば、下掲メールアドレスあてにお寄せいただければ幸いです。

（プロフィール）

昭和39年米沢興譲館高校卒。東京工業大学工学部経営工学科卒業後、野村総合研究所入社。取締役、野村アセット投信研究所常務執行役などを経て、大阪経済大学専任教授

（主な著書）

- ・『高度金融活用人材へのファイナンスの理論と金融新技術』（金融財政事情研究会）
- ・『債券のパッシブ運用』（第1回証券アナリストジャーナル年間優秀論文賞受賞）

（メールアドレス） k-katou@mti.biglobe.ne.jp

（主な参考文献）

- ・横山昭男『上杉鷹山』（吉川弘文館）1968年
- ・小野榮『米沢藩』（現代書館）2006年
- ・藩政史研究会『藩制成立史の総合研究 米沢藩』（吉川弘文館）1963年

- ・渡邊與五郎『近世日本經濟史 上杉鷹山と米沢藩政史』（文化書房博文館）1973年
- ・吉田義信『置賜民衆生活史』（国書刊行会）1973年
- ・横山昭男編『上杉鷹山のすべて』（新人物往来社）1989年
- ・池田成章編『鷹山公世紀』（吉川弘文館）1881年
- ・甘粕繼成『鷹山公遺蹟録』（同書刊行会）1924年
- ・『米沢市史』（米沢市役所）1944年
- ・『米沢市史 近世編1』（米沢市）1991年
- ・『米沢市史 近世編2』（米沢市）1993年
- ・小村弑『北越の豪農 渡辺家の歴史』（関川村）2001年
- ・『酒田市史 上』（酒田市）1987年
- ・『酒田市史 史料篇5集』1971年